第二章　墓守と死者の泉

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

長い間のねぐらであった森はとうに抜けてしまっていた。広がるのは砂の大地。森を行くと黄色の草原が広がっていたが、半月ばかり歩くと大地は乾燥した細かな砂となった。

リョウキの蹄（ひづめ）が地に沈み、蹴れば砂埃（すなぼこり）が風になびく。時折、思い出したかのように植物があった。その辺りには湧水がある。それで喉を潤し、ひたすら前へ。視界に収まらぬほど広く伸びた、砂の波の奥にあるのは地平線。太陽の沈む位置は足元の高さだ。

リョウキが巻き上げる砂を避けて、トゥラスは一行（いっこう）の前を歩いていた。自分の足跡をよちよちと兄弟がたどってくる。この小さい兄弟には名が与えられた。チュンオウが名付け親となり、子虎はヒョウビと呼ばれている。ヒョウビも木々のない世界を物珍しそうに探検していた。

木がない世界など、トゥラスは想像したことがなかった。この寂寞（せきばく）たる大地は、なぜ木々と共にいないのか。それでも生きていけると、強がってみているのだろうか。己のみが生きていてなんの意味があろうか。

生き物たちはこの地を避けている。あんなに見かけた兎もリスも、この地にはいない。心細いだろうに。なぜ共に生きないのだろうか。

「どうしてここには木がないんだ？」

簡潔なトゥラスの問いは、老獪の知恵の袋を紐解いた。リョウキの上から、チュンオウは穏やかな眼差しでこちらを見下ろした。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「ここはあまり雨の降らぬ土地なのだ。土に根を下ろし、地下の水を吸い上げる木は、やはり水がなければ育たぬ。だが、あまり水を必要といない植物はこういった土地にも根を下ろすことができる。そうら、それもある種の植物だ」

チュンオウが指差したのは、土の上に置かれたようにある丸い緑。肉厚なそれは、到底葉のようには見られない。トゲトゲとしたものも生えている。不思議な形だ。

「それは身体の中に水を多くため込んでいる。だからそのように分厚く、すぐに干からびることはない。雨の降らないこの地に適した植物なのだ」

そう言われてよく見ると、このような植物は幾つも大地にあった。時折転がる岩の隅にもある。大地は独りではなかった。

「植物だけではなく、動物も形を変えて生きている」

チュンオウの視線の先に、砂と同じ色のトカゲが歩いていた。よく見ると、自分の足元にはずんぐりとした虫が歩いている。

「……こんなところでも生きられるのか」

先を行くリョウキ。トゥラスは駆け足で追いついた。

確かにこの地にも生き物は息づいていた。森の生き物たちとは形が違うから気付かないだけで、多くの生き物がこの大地に生きている。森を出てからは驚くことばかりだ。

そんな土地があったと思ったら、ずっと行ったところに広大な森が広がっていた。トゥラスがすみかとしていた森よりも木々は高く、緑も濃い。葉は表面がつるつるしていて、森とは言え、まるで違う種の木々と生き物の

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

集合体だった。

数日歩いてゆくと、遠くに山が顔を出した。こちらの土地は砂漠と違い、突然雨が降る。狂ったように降り、数日連続で服がびしょぬれになって大変だった。だがしばらくすると慣れてきて、大雨の降る時間帯がわかるようになってきた。

遠くにある山に太陽が沈むころ、空は雲に覆われる。だからこの日も、太陽が傾き始めたころに雨宿りができるところを探した。

大きな葉を適当に編んで、簡単な屋根をつくった。チュンオウが褒めてくれたが、トゥラスはそれほどでもないと思っている。このくらいできなくて、木の上に家など作れまい。

雨はすぐに上がったが、もう夜なので進むのはやめ、今日は休むことにした。このように夕暮れ以降は進めぬ日が続いていた。自然と歩む距離も短くなる。この森を抜けるのは時間がかかりそうだった。

ただこの雨は、厄介と共に、何にもかえがたい潤いを与えてくれる。生きるのに必要な水は、砂漠では探すのに苦労した。そう考えるとこの土砂降りの雨は、生き物たちへの恵みそのものだ。

天というのは不思議だ。あの空という掴みがたい広い場所から、どうして水が降るのだろうか。

邪魔な頭の布は脱ぎ捨てて、すっかり雲の消えた夜空をトゥラスは見上げた。星の瞬きをその瞳に映し、トゥラスは雨という当たり前すぎるものについて考えた。

砂漠でチュンオウが言った。水がなければ生き物は生きられない。いくら乾燥に適応する身体を持ったとて、全く水がなくては生き

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

ることはできないのだ。

チュンオウは、この身は半分以上水から成っていると言っていた。にわかに信じがたいが、よく考えれば納得はできる。深く皮膚を切れば、血はいくらでも滴る。血は身体に巡る水だ。

星を映した瞳を手のひらに落とした。白に生まれたこの体。透き通る皮膚の下に、命の川が流れるのが見える。

「トゥラス」

もう休んでいたと思っていたチュンオウに「何だ？」と振り向いた。

「ヒョウビがまだ戻らぬ」

あの好奇心の塊の兄弟は時折姿を消す。見たいものがたくさんあるようだ。しばらく姿を消した後には、いつもひょっこり戻ってくるし、時にはありがたい食糧をくわえてくることもある。

小さくとも虎であるのであまり心配しないのだが、そう言えば今日は帰りが遅い。もう日もすっかり落ちて、丸い月が高々と輝いている。ヒョウビは虎だが、まだ幼い。

「探しに行ってくる」

トゥラスはチュンオウにもらった剣を持ち、月光に湿気が目に見える粒で漂う森をかきわけた。

「ヒョウビ、どこだ！　そろそろ戻ってこい！」

森の隙間の闇にトゥラスは呼びかけた。するとすぐにヒョウビが応えた。こちらに来いと言っている。

獣の声は、口から発する声ではない。トゥラスが聞いているのは、彼らの心の形だ。いちいち彼らが言葉にしなくとも、その思い描

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

くものは流れ込むように伝わってくる。聞いているというわけでもなく、見ているという表現も違う気がする。トゥラスはこの感覚をなかなかチュンオウに説明できないでいた。だが、やはりなんとなく獣たちの思いがわかるのだ。

ヒョウビの声のする方へ、トゥラスはうねる蔓（つる）と突き出る枝葉を押しのけて進んだ。そのまま進むと、森が開けた。

水の匂いがする。川ではなさそうな空間の広がりを感じるので、大きな泉だろうか。そのほとりで、ヒョウビがこちらを見ていた。

「こんなところまで来てたのか。爺さんが心配してたぞ」

謝りもしないで、ヒョウビはトゥラスに飛びついてくる。本当にまだ幼い兄弟だ。仕方ないなとヒョウビの頭を撫でてやった。気持ちよさそうにヒョウビは目を細める。

「ここに俺を連れてきたかったのか」

確かに泉はありがたい。この重たい湿気の森に、肌はべたついていた。水浴びでもしてすっきりしたかったのだ。そのトゥラスの心に応えてくれたのだろうか。

こちらの気持ちも、不思議と獣たちには伝わる。自分が彼らの思いを汲みとるように、彼らもまたそうしてこちらの考えていることを理解するのだろうか。

言葉を持たない彼らは、そうして理解し合っているのだろうか。だとしたら、言葉を得た人間はその力を失ったに違いない。彼らや自分が特別なのではない。人間だけが、できないのだ。

「ありがとう。これで助かる。爺さんも喜ぶ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

だろうな」

チュンオウが心配しているからと戻ろうとした時だった。ヒョウビが泉に走り、そのまま飛び込んでしまった。

「ああ、濡れちまって……。それじゃあ一緒に寝てやらないぞ」

トゥラスは嘆息して、しぶきを上げるヒョウビの元へ行った。

水をかき分けて、ヒョウビはしきりに水中を気にしていた。魚でもいるのだろうか。そう思って見ていると、ヒョウビが水中から何かをこちらに転がしてきた。泉の縁に、鼻で器用に押し上げる。月夜に、白い塊がごろりと転がった。

「何だ？」

見てくれと言わんばかりのヒョウビの前にしゃがみ、トゥラスはその白いものを剣でつついた。不安定なそれは転がって向きを変え、トゥラスにその存在を主張した。

言葉にならない何かを、ぐっと飲み込んだ。

それは人骨のようだった。それも頭部だ。何も見ていない、穴の目がこちらを覗く。

ざわりと背筋に冷えたものが走り、思わず立ちあがった。そして、さらに大きな悪寒に襲われて数歩退いた。

今まで石だと思っていた足元は、無数の頭蓋骨（ずがいこつ）たちだったのだ。足の裏に、何かに突き上げるような不気味な錯覚が襲った。

「何だここは……！」

ヒョウビはきょとんとこちらを見ている。思えばこの幼い兄弟は、ものの伝え方をまだ完全に体得していない。ヒョウビは泉ではなくこれを見せようとしていたのだと、トゥラ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

スはようやく理解した。

「……こりゃ、なおさら明日だ」

ヒョウビに明日来ようと言うと、頷いたような仕草を見せてこちらへやってきた。チュンオウのもとへ戻る道すがら、熱気や湿気をまとっていた風の中に、頭蓋骨たちの冷えた吐息が首筋を撫でた。

夜のうちでは気味悪いだろうと、トゥラスは朝話すことに決めていた。朝食は大雨をしっかり吸ったみずみずしい果実。しかし腹は減っているというのに、昨晩の人骨の山を思い出して喉は細かった。

「爺さん……」

ようやくためたものを吐き出すように、トゥラスは昨晩の泉の話をした。

「それはまことか……！」

チュンオウもさすがに驚いた。自分は世界を知らないので、こういうものも、もしかすると人間の常識であるのかもしれな。そのように頭の片隅で思ってはいたのだが、やはり違ったようだ。食事の後、そこへ行ってみることとなった。

勝手知ったように、ヒョウビが先頭を行った。それをトゥラスが追って、チュンオウはリョウキを引いていた。

歩みの遅いリョウキを、チュンオウは励ましている。それでもなかなか歩みは速まらなかった。それはそうだ。リョウキはこの先の不気味を、ヒョウビの無暗に開かれた思考を覗いて知っている。行きたくないのだ。

茂る森がそこで途切れた。あの泉が広がっている。太陽の光を受けて、水面はきらきら

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

と光っていた。目が痛くなって、トゥラスは布きれのフードを目深に降ろした。泉は昨晩とまるで違って、美しい。骨さえなければ飛び込むというのに。

チュンオウはまだ後ろだが、トゥラスはチュンオウを待たずに意を決して一歩踏み出した。もろい木を踏み潰すのとはまた違う奇妙な感触で、白い骨が潰れた。

泉は澄んだ水をたたえている。底もよく見えた。水底には白いものがごろごろと転がっていて、その目玉の穴の部分には綺麗な魚がすいと通り抜ける。

涼やかな風が吹いた。

「なんと！」

チュンオウの片足で風化しかけた骨が潰れた。

「一体、ここで何があったというのだ……」

人間が殺し合った跡、大量殺戮だろうか。だがこれほど密集して骨になるだろうか。そのようにチュンオウはつぶやいた。

チュンオウは膝をつき、手を合わせて頭を数度下げた。一体それは何の意味を持っているのだろう。握手のように何か意味があるはずだ。しかしこの光景から、少し非日常的なものに立ち入った儀式なのだろうと、トゥラスは推測だけでそっとしておいた。

蜻蛉（とんぼ）が水面を滑り、泉の縁の頭蓋骨には美しい緑色の鳥がとまっている。美しさと不気味さが入り混じるおかしな光景だ。

すると、不意に水面が弾ける音が聞こえた。そちらを見やると、泉に何かが飛び込むのが視界の端で見えた。泉に潜ったそれは水面下に沈黙していたが、しばらくすると水を割っ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

て現れた。

まだ水をたたえた髪が、金色に輝いている。筋肉の少ない細い身体の色は、やや白い。

視線に気づいてか、彼はこちらに振り返った。水の滴る髪が頬にはりつき、首筋を伝う滴は彼の華奢な身体を流れ、泉に還った。まだ下半身が水中の彼は、その手に頭蓋骨を持っていた。射るような眼差しが、トゥラスに向けられた。

「なんだ、あいつ……」

チュンオウも気づいたようだが、何も言ってこなかった。多分同じように泉に現れた青年を見ているのだ。彼は妙に目を惹く。男だと言うのに、どこか妖艶な色を纏っていた。

彼は静かにトゥラスらに背を向け、そちら側の岸に上がった。そこも骨の岸辺だ。濡れたズボンは彼の足に張り付いて、細さを強調させる。彼は水滴の流れる上半身に、岩の上に置かれていた大きくて上等な布をまとった。相変わらず頭蓋骨は抱いたままで、少し顔を拭ってからようやくこちらに向き直った。

明らかにこちらに歩いてくる。トゥラスは彼の射るような眼光を受け止めながら、待ち受けた。

ややつり上がった細い眉、通った鼻筋。女と見まごうような美しい顔だ。長いまつげに縁どられた大きな目は色の薄い茶色で、肌は白い。しかしそれはトゥラスのようなものではなく、そういう人種であるのだと固定された色だった。

「その足で、何を踏みつけている」

中性的な声で、語気を強めて言ってくる。それはこちらが聞きたい。この人骨の山は何

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

なのだ。トゥラスがそれを言葉にする前に、もう一度青年は言った。

「彼らをいつまで辱(はずかし)める気だ。用がないのなら早々に立ち去れ。しばしこの泉に佇(たたず)むというならば、靴を脱げ」

男をよく見ると裸足であった。裸足で踏みつけるのも同じではないか。トゥラスは眉をひそめたが、チュンオウはすぐに頭(こうべ)を垂れた。

「これは申し訳ない」

急いで靴を脱ぐ。そして「そなたも早く脱ぐのだ」と言ってくるので、そういうものなのかと、トゥラスもチュンオウに倣って脱いだ。

男はトゥラスらが裸足になったのを見届けると踵(きびす)を返した。それをチュンオウが止めた。

「待たれよ。これはどういう謂(いわ)れの泉か。……この量の人骨、ただごとではなかろう」

男は流し眼で、少しこちらに顔を向けた。

「ここはディンギルの泉。死者が眠る墓だ」

「これが、この泉全体が墓と！」

「その通り。この墓を靴で歩くのは死者を冒涜するに等しい。貴兄らの理解に感謝しよう。チシュパクの人間ではないのだろう？　この土地の礼儀を知らぬのも仕方のないこと。そこは泉の彼らも許そう。彼らは寛大で利口だ」

男はそう言うと、泉を見た。動物らが集う穏やかな、どこにでもあるような光景だ。た

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

だし、それは頭蓋骨の水底を見なければの話だ。

「して、あなたはここで何をしておるのですか」

「私はここのニンアズだ。チシュパクの外の世界では……そうだな。一言で言えば、墓守（はかもり）だ」

「そうであられましたか。死者眠るこの地を荒らしてしまい、すまないことをいたした」

ほんの少し、男が頬を緩めた。

「この泉は冥界の入口だと恐れられて、あまり人は近寄らない。久しい客だ。歓迎しよう」

着いてこいとでも言うように、彼は人骨の岸辺を進んだ。トゥラスはこの不気味な場所に留まるのは気がひけたが、チュンオウがリョウキを手早くそこに繋いで彼に続いてゆくので、仕方なく行くことにした。ヒョウビはリョウキと共にいると言うので置いていく。

裸足で骨の山を歩くのは、やはり気味が悪かった。森の生活でいくらも足の裏は分厚くなっているから痛いわけではないが、触れるものが人骨であると、どうも心地は良くない。

岸を進むと、そこには岩にぽっかりと空いた洞窟があった。無言で男は進んでゆく。中は外の湿気から隔離されて冷たく軽い空気が通り抜けていた。ようやく人骨の地は途切れて、転がっているのは本物の石だ。奥にほんのりと光りが見えた。

男は洞窟の少し広い空間で歩みを止めた。天井には穴があいていて、薄明るい程度に光が差していた。

男がランプに灯りをつけた。光が広がり、

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

空間が広く照らされた。たき火や鍋などの生活の跡が見られるので、ここがこの男の住みかなのだろうとトゥラスは推測した。

「ここは私に与えられた家だ。祖父が死んで、父は早くに亡くなっていたので、私が継いだ。祖父の後にここに住み着いて、まだ十年も経っていない」

「墓守の一族か」

男はチュンオウに試すような笑みを見せて、それからいくつか古い頭蓋骨がのっている小さな祭壇に、持ってきた頭蓋骨を優しくのせた。この男の笑みは好きではないが、その物腰は優雅だ。

「私は遠い東よりやってきた。少し北寄りの東。名をチュンオウと申す」

「……その衣装と名の響き、采覇（さいは）の者か？」

采覇とは、チュンオウの生まれ育った国だと旅路に聞いた。そこの男児は髪を伸ばし、頭で団子にするのが習慣らしく、それでチュンオウもそのようにまとめている。服も豪華で、細かい織目で空想の動物ばかりが描かれている。不思議な模様だと言った時、チュンオウはそれが文化というものだと教えてくれた。

土地や国によって、人々の思想や生活は確かに異なる。たとえば気候によって服の様子が違ったり、崇める神が違ったり。だとすればこの目の前の男も、また違った世界の中にいるのだろうか。泉に骨を落とし、頭蓋を愛でるのも、彼の育った文化というものが常とさせたのだろうか。

「なんと、このはるか遠い地で采覇を知る者がおるとは」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「私は水から知を得る。水はこの広い世界を循環しているから、何よりも博識だ」

華奢な身体には納まりきらぬ堂々さを、この男は持っていた。強い眼の光りに、得体のしれないものをトゥラスは感じた。

「お前は一体何者だ？」

ついに我慢も絶えて、トゥラスは率直に聞いた。

「私はこの泉を守るニンアズ。名はリビ。お前、名を訪ねる時には己から名乗れと習わなんだのか」

鋭くなった彼の眼光の矢に、トゥラスは虎の子である気迫で睨み返してやった。この程度の眼光に怖気づかぬ生き方を、兄弟らに教わったのだ。

「悪いな。俺はそんなしがらみのあるところでは育ってないんでね」

「トゥラス！」

チュンオウが叱ってくるが、別に気にすることはない。これが自分の育った世界だ。

しかし、チュンオウの教えもよく分かる。旅の道中、小さな村をいくつか通り過ぎた。そこでは人々が争いなく生活できるように、多くの規則があるとチュンオウは言った。それを守らねば恵みはないし、彼らの培ってきた文化も否定してはいけない。旅人は故郷の文化を誇りに思いながらも、常に外の文化や規則も受け入れられる寛容な心を持て、と。

確かにそうすべきだと思う。自分の生き方を否定されるのは、誰だって嫌だろう。

だから、名乗るとは決めていた。

トゥラスは、真っ白の髪を覆っていた布を、勢いよく脱いでやった。

「俺はトゥラス。ここことは別の森でずっと虎

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

と過ごしていたが、この爺さんに引っ張り出されて一緒に旅をしている。この姿は生まれつきでね。ついでに光りが苦手だ。……さあ、これで文句はないだろう。お前は誰だ。その骨で一体何をする気なんだ」

この白い髪を見てか、男は目を丸くしていた。しかしそれでもじっとトゥラスが睨みをきかせていたので、彼もまたこちらに眼力を注いできた。ただ、怪訝（けげん）な色を浮かべながら。

「光りが苦手……？　お前、夜鷹（よたか）を従える者か？」

「夜鷹？」

突然何を言い出すのだと眉をひそめたが、リビはトゥラスの疑問には答えなかった。代わりに、冷ややかな風が足元を滑り始めた。

リビの眼光が、一層強まる。足元を流れる冷たい風は、いつの間にか水になっていた。

「おお……！」

チュンオウも、突然水が浸入してきて驚いている。リビはねぐらが水浸しになるのも構わない様子で、そちらには目もくれない。念じるように、目を鋭くさせている。

踝（くるぶし）あたりまでの水は、いつの間にか感触がぬるりとしたものに変わっていた。それほど明るい場所ではないので、足元のものが何かとチュンオウは気づいていないようだが、夜目の利くトゥラスは叫んだ。

「爺さん、逃げろっ！」

チュンオウを突き飛ばしたが、トゥラスは間に合わなかった。足元のぬるぬるしたものが、絡みついてきてトゥラスを締め上げる。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.